

『光を掲げた人々』

幼稚園の父

フ レ ー ベ ル

寺 田 太 郎

昭和二十六年六月二十四日(日)NHK放送「光を掲げた人々」の台
本転載。その快諾について日本中央放送局著作権課及び作者寺田太郎
氏 感謝する。

配 役

フリードリッヒ・フレーベル	青 山 杉 作
ベルタ・フォンマーレン・ホルツ・ビュロウ夫人	東 山 千 栄 子
ユリアーネ(夫人の侍女)	東 惠 美 子
馭 者	栗 山 昌 良
フリッツの母親	川 上 夏 代
フリッツ	渡 辺 少 年

☆アナウンス 毎週日曜日のこの時間には、
誠実な心と、深い愛情をもつてその一生を貫
き、人間の幸福にかずかずの貢献をした人々
の姿をお伝え致します。
これらの人々は、世俗の成功を求めず、報
いられることを期待せず、ひたすら自分の信
ずる道を生きました。

ある人は有名になり、ある人は不遇のうち
に一生を終りましたが、これらの人々の気高
い生涯は、私たちの心に絶えることのない勇
気と希望の灯を点するものであります。

(アナウンス)フリードリッヒ・フレーベル
は、一七八二年に、ドイツ・ツリーリングヤ地
方のオーベルワイスバツハという、森にかこ
まれた小さな町に、教会の牧師の子として生
まれましたが、生後九ヶ月にして母を喪いま

した。

青年時代には、学校に通つたり、森林局の
書記を勤めたり、あるいは建築技師を志した
りして、生涯の方向を模索していましたが、
偶然のような機会から、フランクフルトで小
学校の教師になりました。この時、彼は二十
四才でした。

しかし、この偶然がフレーベルの運命を決
定しました。のちに、彼はこう書き録してい
ます。

フレーベル(四十五才位の声)私は、今ま
でまだ見たことのない、しかし常に憶がれて
おり、常に欠点を感じていた何物かを発見し
たような気がした。あたかも私の生命が、つ
いにその天賦の要素を発見しようなもので
あつた。私は、魚が水を得た如く、鳥が空に

あるでしょう。ユリアーネ。

侍女 はい、奥さま。

ビュロー あの方こそ、土地の人たちからは「馬鹿お爺さん」と云われているけど、でも、後の世の人からは記念碑を建てられるでしょうよ。

侍女 ……はい。

ビュロー ……私はあのお方にお目にか、らなければならぬわ、そして、教えて頂、かなければならぬのだけわ。

ビュロー (朗読) その日の夕方、宿の主人から「馬鹿お爺さん」の住所を聞き、私はその百姓家を訪れた。「馬鹿お爺さん」は、一軒の百姓家を借りて、そこを教室とし、住居もしているのだつた。

ドアにノック(ビュロー)

ドア、開く(フレibel)

フレibel お、これは……

ビュロー 始めてお目にかゝる者でござ、います。私、ベルリンにおりますベルタ・フォン・マーレンホルツ・ビュローと申す者でござ、います。湯治の為こちらに参りまして……

フレibel さき程、丘へ行きます道で、お目にかゝりましたね。

ビュロー はい、それで、先生のお話を承まわらせて頂きたいと存じます……

フレibel さあ、お入り下さい。どうぞ

ビュロー (朗読) 通されたのは、教室であつた。しかし、そこは同時にこの人の書

齋にも当てられているらしい。机と椅子と本

があつた。また子供たちの遊び道具らしい積木が、たくさんあつた。

その人は、にこやかに私に向つて椅子にか

けた。

フレibel さあ、どんなことをお話すればよいのでしょうか……

ビュロー 実は私、今日、先生が子供さんたちを教育していらつしやる御様子を見物しておりまして、全く心をうたれたのでござ、います。先生、先生はどういうお考えから、こ

ういう御事業をお始めになられたのでござ、いますか……?

フレibel ……そうですね……一言で申せば、それが、世の中で何よりも重要なことであるからです。なぜと申せば、奥さま、人間が今あるよりもよりよくなるためには、われわれが望んでいるすべての美しい理想は

実現されませんでしよう。

ビュロー はい、さようでございます。

フレibel とすれば、われわれは子供の為に盡さなければならぬことになるのでござ、います。ところがこれまでの教育と云へば、便宜的な因襲や不自然な法則の中に子供を閉ぢ込めることでした。また、学問と云へば、外から無理に知識を詰め込むことだけで

した。これでは、子供の創意を殺すほかのなにもでもないのです。

ビュロー では先生はどういうお考えをお持ちでいらつしやいますのでし

ビュロー (朗読) ……これが、私が、フ

レーベル先生の姿を見た最初だつた。しかし、その「馬鹿お爺さん」と呼ばれる人がフ

レーベル先生だということは、私はまだ知ら

なかつた。それに、フリードリッヒ・フレーベ

ルという名前こそは知つていたが、その人の

教育方針がどんなものかというようなことは、

私は、私はほとんど関心を持つていなかった。

数日の後、散歩の途中で、私はこの「馬鹿

お爺さん」に間近かで出会つた。長い灰色の

髪までの村の子供の一面を率いていた。子供

たちは大てい裸足で着物もほんの着ていると

いう名ばかりであつた。彼等は二人づ、並ん

で丘の上へと上つて行つた。その人は丘の上

で遊戯の指図をして自分も一しよに遊んだ。

その人が、以て事に當つてゐる愛に充ちた

忍耐と、一切我れを忘れきつてゐる様子と、

自分の指導で子供たちにいるろくの遊戯と、

せている終始の態度には、著しく人の心を動

かすものがあつた。……私は、しらすしらす

涙を落すにはいられなかつた。

侍女 奥さま……

ビュロー (うるんだ声で) どうして、

あ、いう美しいことが出来るのでしょうか……

侍女 ほんとに、心から子供たちと一しよ

になつていらつしやいますのね。

ビュロー 「汝ら幼な唄の如くならず

ば、天国に入ることを得ず」と聖書に書いて

フレールベル 奥さま花を御覽なさいまし。美しい花を咲かせるためには種を蒔き、その種から生えた芽を日夜愛し培わなければなりません。子供は、この種なのです。種と同じように子供には神性が与えられています。

……神は創造者です。そして、その創造する力を神は子供に与えられたのです。それは自然界の種の中にあります。育つものを育てなければならぬのです。

……子供を愛すると申しても、その子供の国を身をもつて守ることをせずして、子供に何の教育が出来ましょうか。

ビュロー ……判りましてございます。落ちつきのないたゞ今の世の中に、先生のよくな立派なお考えの方がいらつしやいますこと……ほんとに心強く存じます。

フレールベル 私たちは、現在を、過去からも未来からも切り離すことは出来ません。すべての未来への要求は現在に始まる生命の更新です。そして、子供においてこそ、将来の種が存在するのであります。

ドアにノック(母親)
フレールベル お、また誰か尋ねてみえたようです。ちよつと失礼します。

ビュロー どうぞ。
足音 ……(フレールベル)
ドアを開く(フレールベル)

母親 先生様！
フリッツ 先生！
フレールベル お、フリッツとお母さんじ

やないか、どうしたね、さ、お入り。

フリッツ 先生……(なき声で)
フレールベル どうしたフリッツ……うん？
フリッツ おらあ、いやだいやだ……

(泣く)
母親 先生様……お世話になりましただが、実は、おれたちの家じやあ今度プランケンブルクに移ることになりましたで……それ……

フレールベル お、プランケンブルクに引越されるのか……

母親 はい、それでお別れに來ましただ……
フレールベル そうですか……フリッツ、泣くんじやないよ、ほら おじいさんが一しよに遊んであげるから、ね。ほらほら、おじいさんと遊ぶんだよ。さ、おいで、さあさあ……

ビュロー (朗読) 子供は気嫌をなおして、先生と一しよに び出した。でも、どうして、も先生と離れて、い所に行くのは嫌だという。母親が連れて帰ろうとすると、先生の首筋にすがつて、泣きながら行こうとしなかつた。

フリッツ おらあいやだ……行くのはいやだ……(泣く)

母親 ほんに困つた子だなあ……そんなに先生の側離れるのがいやだか？
フリッツ いやだ、いやだ……

母親 ……あ、あ、そんじやしようがねえ……フリッツお前はお祖母さまと一しよに村に残るだ。そしたら、毎日先生に逢えるべ？
フレールベル お、それはいいことを思いつかれた……そう出来るものなら……え、フリッツ、よかつたなあ……

母親 仕方がねえでももの、先生……先生に御めんどうみて頂くだ。

フレールベル い、とも、い、とも。
母親 それじやあフリッツ、そういうことに決つたら、今日は、おいとまするべ、な、フリッツ。

フレールベル よかつたな、フリッツ……また、これまでと同じように、ほうね。
母親 お願ひ致しますだ。それじやフリッツ、先生様にさよならして……

フリッツ 先生、さよなら。
フレールベル お、さよなら。明日おいでよ。じやあお母さん、心配しないで元気に働きなさいよ。

母親 はい、ありがとござえます。では何分よろしく……
フリッツ 先生、さよなら。

フレールベル はい、さよなら……お母さん連者で暮しなさいよ。

フレールベル やあ、どうも失礼しました。
ビュロー ようございましたこと……お母さんは寂しいでしょうけれども……
フレールベル そうですすね、しかしあれもわ

が子を思う母の愛なのです。

ビュロー 母親は、子供のためには自分の楽しみをも犠牲にしなければならぬのでございますわね。

フレibel さよう、それこそが母の尊さですね。……つねに私はこう考えています。すべて国民の命は婦人の手にあることに母たる婦人の手にある……と、そうであつてみれば……婦人こそ人類の教育者です。婦人が教養をもたなければ、人類の未来の幸福は完成されないのです。

ビュロー そういうことになるのでございませうか。

フレibel つきましてはね奥様、私はこのリーベンスタインで、子供の教育と同時に婦人のための教育を始めようと思つてゐるのです。つまり、子供を教育するための保母の養成所をここに開こうと考えてゐるのです。

ビュロー まあ、さようでございますか。フレibel あ、このリーベンスタインに、世界ではじめての幼稚園と保母養成所が出来るのです。

ビュロー 「幼稚園」でございますつて？
フレibel さよう、キングダー・ガルテン

……子供の園です。

ある晴れ渡つた春の日、私はカイルハウカからブランケンブルクに行く途中の峠道を歩きながら、はつとこの名前を考えついたので、キングダー・ガルテン……幼稚園……「これだ、これだ！」と私は叫びました。

ビュロー 先生、失礼でございますが、先生のお名前は……？

フレibel 私ですか、私の名は、フリードリッヒ・フレibelです。

ビュロー まあ……先生があつたフレibel先生でいらつしやいますか。

フレibel そうです。私はフレibelです。そして私が名づけたのがキングダー・ガルテンです。奥さま、これほど子供の学校にふさわしい名前がほかにあり得るでしょうか！これから五年・十年……そのうちに、世界中の国々にキングダー・ガルテンが設けられるのです。そしてそのキングダー・ガルテンの門は、神の国に入る門となるのです。

ビュロー (朗読) リーベンスタインに滞在している間中、それからは、私は毎日のようにフレibel先生の許に伺つた。先生が子供たちに抱いてやる愛は何という純粹な愛情なのだろう。愛は、先生の眼から輝き出で、磁石のように子供を惹きつけるのである。そして、先生が子供たちの内にその若い芽を見出してゐる人間愛である。こういう時、「私はひとりひとりの子供の内に完き人の可能性を見る」と先生のおつしやつた言葉が、私に不滅の印象を与えたのであつた。やがて、私がベルリンの夫の許に帰らなければならぬ日が近づいた。よくよく考えたまふ、私は侍女のユリアーネを、フレibel先生の許に残して行くことにした。先生の保母養成

所で、彼女を教育して頂くためである。

ドアにノック(ユリアーネ)

ビュロー お入り。

ドアの開閉(ユリアーネ)

侍女 奥さま、お馬車の用意が出来ました。フレibel先生は御門のところでお待ち兼ねでいらつしやいます。

ビュロー あ、そうですか……ところでユリアーネ、あなたは本当にここに残つてくれますか。

侍女 はい、奥さま。

ビュロー 私の代りに、先生の教えを受けて下さいね。

侍女 はい。

ビュロー 寂しくはないでしょうね……もし、寂しいと思つたら、私と一しよに帰つてもいいですよ。

侍女 い、え、奥さま、寂しくはございません。フレibel先生は、奥さまがお亡くなりになつてから、もう十年あまりになると伺いました。あのお年で、おひとりではいらつしやるフレibel先生の方が、私などよりは、ずつとずつとお寂しくいらつしやるのですわ。私、先生のお傍にいてさし上げとうございませぬ。

ビュロー そう……お願いしませぬ、ユリアーネ。私は、また必ずここに帰つて来ますからね。その時には、あなたも立派に先生のお手伝いが出来るようになって下さいよ。

侍女 はい、奥さま。

駈者 奥さま……まだお出かけになりま
ねえだか……！

ビュロー あ、呼んでいるわ。さあ、
では出かけましょう。

ビュロー (朗読) お別れの時、フレ
ーベル先生は私に一冊の本を下さった。それ
は、「人間教育」と題する、先生の御著書で
あつた。この御本の中に、教育に関する先生
の御抱負はすべて書かれていた。

さて、ベルリンに帰つた私は、宮廷につか
える夫の妻として、忙しい日々営みに逐わ
れていた。フレーベル先生やユリアーネとの
文通は続けながらも、月日が流れて行つた。

静かに始まり、激しくもり上る

ビュロー 一八五一年、八月。悲しむべ
き破局が訪れた。プロシヤ政府によつて、幼
稚園禁止令が發布されたのである。

何としたことであろうか。私は、夫ともど
も、この禁止令によつて来た原因を探つて
みた。原因は、フレーベル先生の甥カール・
フレーベルと先生を取り違へて、カール・
フレーベルの幼稚園は、社会主義的無神論的傾
向を有するものと看做されたのである。

何という誤解であろう。しかし、それが誤
解であることが明らかになつても、政府は己
れの非をあばくことをおそれて、禁止令を解

かないのである。あの、信仰深いフレーベル
先生が、かりそめにも無神論者と誤解され、
生涯の御事業を根絶しにされて、どんなお心
でいらつしやるだらうか……？ そう思うと、
私はもうじつとしていらなくなつた。

馬車……

ビュロー 私は、はるかな道中を、先生
の許に急いだ……

別な歩調の馬車、駈ける……

馬車……近づく……

駈者 ドウ、ドウ、ドウ……

鞭の音

馬車 停る

駈者 奥さま、着きましてごぜえます。

ビュロー 扉をあけて下さい。

駈者 へえ。

馬車の扉を開く(駈者)

降りる足音……(ビュロー)

ドアにノック(ビュロー)

ドア、開く(ユリアーネ)

侍女 まあ、奥さま！

ビュロー お、ユリアーネ！

侍女 よくおいで下さいましたこと、奥さ
ま……(声がうるむ)

ビュロー 先生は……先生はお元気で
か……？

侍女 はい。

(OFF) 先生、フレーベル
先生、フォン・マレーンホルツ・ビュロー

の奥さまがお見えになりました。

ビュロー まあ、先生！(と、遠くに)
急ぐ足音……(ビュロー)

フレーベル(や、OFF) お、これは奥
さま……！

近づく足音……(フレーベル)

ビュロー ……フレーベル先生！

フレーベル よくおいで下さつた！

ビュロー ……先生、お寂しくていらつ
しやいましょうね……。何と申し上げてよ
いか……。

フレーベル 仕方ないことです。私も一
時はがっかりしました。しかし、三十年來の
私の親友、ウィルヘルム・ミツデンドルフが、
馳けつけて、私を慰め勵ましてくれました。
それから、こうして奥さまもはるばるおいで
下さつた。

ビュロー いえ、私などは……

フレーベル 奥さま、今では私はちつとも
がっかりなどしてはおりませんよ。なぜと申
せば、私の背後には、私の本を読んでくれた
人がたくさんいます。また、私と遊んだこと
のある子供たちもたくさんいます。禁止令が
解かれるのも、ながいことではありません。
もし永いようでしたら、私はアメリカ合
衆国に行く積りです。あの自由の国で、子供
たちと一しよに楽しい幼稚園を開く積りで
す。そうです。私はちつともがっかりなどは
していません。私には神と真理とが味方なの

ですからね、ハハハ……

ビュロー（朗読）その翌年になつても、幼稚園禁止令は解かれなかつた。そして、フレイベル先生も、アメリカへは行かれなかつた。先生の御健康が、それをゆるぎなかつたのだ。ある日、ユリアーネからの手紙が届いた。

侍女（手紙）悲しいお知らせを致さねばなりません。六月二十一日、フレイベル先生はお亡くなりになりました。ほんの二月前、満七十才の御誕生日のお祝いに、子供たちの手

によつて月桂樹の冠をお飾られになつたのでしたが……。

先生は、ミツテンドルフ様と私とが、おみとりする間に、静かに安らかに、苦難の多かつた御生涯をお閉じになられたのでございます。

ビュロー（朗読）いまは、幼稚園禁止令も解かれた。先生のお言葉「いざやわれらをわれらが子供に生きしめよ」を刻んだ墓標の下で、先生はほ、えんでおられることであらう。私は、始めて先生の教えを伺つた時の、

あの先生の力強いお言葉を、いまもなお、ありありと耳に聞く思いがする。先生の予言は実現されたのだ。

フレイベル キンダー・ガルテン！これほど子供の学校にふさわしい名前がほかにあり得るでしょうか！ これから五年、十年……そのうちに、世界中の国々にキンダー・ガルテンが設けられるのです。そしてそのキンダー・ガルテンの門は、神の国に入る門となるのです。（おわり）

放送劇 『幼稚園の父フレイベル』 聴観記

倉 橋 惣 三

昭和二十六年六月二十四日午前。NHKから、『光を掲げた人々』の一つとして、『幼稚園の父フレイベル』が放送された。フレイベル百年記念行事の中に加えられたものである。資料提供の関係もあつて招かれたが、私としては、恐らく世界で初めてだと思ふフレイベルの劇化演出が是非観たかつたので、非常の喜びと期待とを以て、放送局に出かけた。NHKでは、二十一日、フレイベルの忌日、東大の宮原誠一君・東京都の教育指導主事山村きよ子・東京都文京区長井形夫人の三君と私との『幼児教育を省みて』という座談会で、日本の保育界の歴史と現状と共にフレイベルについて語る機会

を与えられた廿四日此の劇を放送されたのである。本年はフレイベル百年記念に因む種々の催が世界諸国に行われたこと、思うが、普波にのせて斯くの如く広く伝播された例は、我国だけではないかと思う。愉快の至りである。われらフレイベル学徒として、日本放送協会に深く感謝するものである。さて私は、第四スタヂオの演出者の傍に立つて、厚い硝子越しに、演出の場内を観たというか、聴いたというか、目と耳をこらして、三十分間を楽しんだ。スタヂオの大部分はオーケストラによつて埋められ、それと屏風で仕切られた一隅に、上から下げられているマイクホン、小卓の上におかれた